



立山 貴李子さん
昭和39年尚綱高校卒業。
平成20年3月まで尚綱高校教諭

一人ひとりを見つめることが大切

高校時代は卓球部一筋の日々。大学卒業後に母校の家庭科教諭としてお誘いいただき、40年を勤めました。卓球部の指導も任せていただきましたが、新任のころは授業だけでクタクタに。しかし、生徒たちはいつも一生懸命に卓球に取り組み、第1回熊本県総体では優勝することができました。夏休みに寮生活の生徒を預かり、わが家で合宿のように過ごしたことも懐かしい思い出です。指導する私の方が教えられることが多く、多くの喜びを感じられたこと、今も当時の生徒たちとの交流が続いていることに、とても感謝しています。教諭としては厳しく指導を行ってききましたが、生徒たちは「悪いこと」はちゃんと分かってくれるもの。ですから退職時には、先生方に「生徒はきちんと叱り、その後にケアをしてあげてください」とお願いしました。私学のおさは、生徒の一人ひとりを丁寧に見て、指導できる点、これからは生徒を見つめ、手を差し伸べる教育を続けてほしいですね。



林 のぶさん
平成7年尚綱高校卒業、同11年尚綱大学
書道コース卒業、同15年より尚綱高校教諭

心を磨く女子教育を実践する場

尚綱高校に通う姉がいつも楽し気だったこと、母が建学の精神に共感していたことなどが、母が進学を決意。高校時代は書道部と華道部に所属して、宿泊研修などを通して友人との絆を深めることができ、また、生涯の師と仰ぐ書道の先生と出会うことができました。現在、私は母校で、小さなころからの夢だった書道教諭として過ごせる喜びを噛み締める毎日です。尚綱は、最終的に人間に問われる「心」を磨く女子教育を実践しています。挨拶や掃除といった礼法教育を通して、女性としてのたしなみ、守るべきものを身に付けることができる場なのです。私の高校時代には、パワフルな先生方が多くいらっしゃって、生徒の一人ひとりと向き合う丁寧な教育を行ってこられました。私が受けた教育を、今度は私が生徒に還す番。諸先生方と同じような指導はできないかもしれませんが、私なりのカラーを出しながら、生徒たちへの愛情と教育への熱意を受け継いでいきたいと思っています。

周囲に育てられた教員時代

尚綱学園で教鞭を取らせていただいたことを、大変ありがたく思っています。子育てのために一旦退職した後にも声を掛けていただき、新人時代の10年間は、仰ぎみるような諸先輩方、向学心にあふれた同世代の先生方に囲まれ、私自身も育てていただいたと思っています。未熟ではありましたが、私なりに一生懸命、教育に取り組んできたつもりです。日曜日に保護者会を開き、保護者の方から「張り切ってますね」と言われたり、生徒から集めた作品で文集を作ったり…。楽しい思い出ばかりです。退職後も、職員室にお邪魔すると皆さんが温かく迎えてくださいますし、年齢が近かった古い教え子とは、今では同級生のような親しい間柄になりました。尚綱高校は、120年の長きに亘って女子教育に貢献してこられました。その根幹は、きつと揺らぐことはないでしょう。今後も、良識と品格を備えた女性として社会に巣立つための教育に力を注いでいけることを祈っています。



渡邊 布蔵さん
昭和35年から平成14年
尚綱中学・高校国語教諭

夢に向かって頑張った3年間

小さなころから保育上になりたくて…。尚綱高校を選んだのは、短大の幼児教育科への進学を考えてのことでした。高校での3年間は、夢を叶えたいと頑張った時間。今振り返ってみても悔いが残っていないほど勉強したと思っています。また、同じ目標に向かって、ともに進むことができる友人にも出会うことができました。勉強が辛く感じる時期に語り合い、支え合うことができたからこそ、今の自分があると感じています。先生方にも、随分さまざまな悩みを聞いていただきました。高校入学時に、中学・高校を尚綱で過ごした祖母から「私が在学していた時から制服が変わっていい」と言われ、尚綱の歴史が伝わっていました。現在、尚綱幼稚園の教諭として指導する中でも、尚綱の精神、伝統を大切に、互いを尊重し合える優しい子どもに育ってほしいと願っています。素晴らしい先輩方に囲まれて、これからも勉強を重ね、保育士として成長していきたいと思っています。



松島 亜由美さん
平成16年尚綱高校卒業、同18年尚綱短期大学
幼児教育科卒業、同年より尚綱幼稚園教諭



福嶋 桂子さん
平成11年尚綱高校卒業、
同13年尚綱短期大学幼児教育科卒業

卒業生が誇りに思える女子教育

高校、大学時代を通しての感想は、「楽しかった！」の一言です。在学中には、今でも大切にしている友人たちと出合い、深く付き合うことができました。その中で、先生方からは、基本的な礼儀作法や、きちんとした日常生活を送ることの大切さをしっかりと教えていただき、大変感謝しています。大人になり、社会人として働き始めて、改めて学園で学んだことは役立つことばかりだったと実感しました。世の中はどんどん変化していますが、尚綱高校は、創立当初から「変わっていかない」という点に大きな意味があると思っています。卒業後に、街中などで尚綱の生徒を見かけると、みんな清潔感があり、清楚で素敵。卒業生であることを誇りに思う瞬間です。ですから、これからも尚綱の建学の精神に基づいた女子教育のあり方は変わってほしくありません。人として大切なことを学べる場であり続け、後輩たちに、大人になっていく貴重な時間を過ごしてほしいと願っています。



中矢 真実さん(尚綱高校3年)
平成18年尚綱高校入学。
2年生より尚綱高校生徒会長を務める

部活動に生徒会に、充実した毎日

尚綱に入学したのは、強豪として知られているソフトテニス部に入ったため。入学からの2年間は部活一色の毎日でした。私自身はよい成績を残せませんでした。が、今は、インターハイに出場する仲間を精一杯応援したいと思っています。入学当初は初めての寮生活でホームシックにかかってしまし、精神的に辛い時期がありました。そんな時に親身になって相談に乗っていただいたのが先生方。今もとても頼りにしています。生徒会長に立候補したのは、自分自身にチャレンジしてみたいから。生徒会の全員で体育祭や文化祭の準備、募金活動のボランティアなどに携わっています。大変なこと多いですが、やり逃げした時には達成感を感じますし、毎日が充実していて楽しく過ごしています。高校創立120年と聞いて、私は体育祭で行う扇の舞に女子校としての歴史を感じました。これまで受け継がれてきた伝統を、今後も後輩たちが引き継いでほしいと願っています。